

【 復活のトロパリ 第2調 】

しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし  
死 生 命 爾 死 降

と お き、かみのせいひかりにてぢご  
時 お き、か 神 性 光 地 獄

くをころせえり。しせしものをちかよ  
殺 死 者 地 下

りふくかつせしめしとおき、てんぐんみな  
復 活 時 お き、天 軍 皆

よびていええり、いのちをたもうしゅ  
呼 日 え り、生 命 賜 主

ハリストスわがかみよ、こうえいはなんぢに  
吾 神 み 光 榮 爾 ん ぢ に

きいす。  
歸

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう  
満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコライ  
 照 お 者、亜使徒主教聖  
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
 爾 羊 群 爲 あ め、 お よ び  
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
 全 世 界 爲 生 命 賜 う せ い  
 さんしゃにいのりたまえ。  
 三 者 祈 り た ま え 。

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとことおとせいしんにき  
 光 榮 父 子 お と せ い し ん に き  
 す、  
 せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
 成 聖 者 亜 使 徒 聖 我  
 くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
 國 爾 を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け  
 しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
 爾 は 初 わ 我 國 お 於 己  
 れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
 外 來 者 知 れ ど も、ハ リ ス ト ス の  
 ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
 光 暖 た た か き を な が し、なんぢの て 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
 屬 神 子 爲 彼 等 神  
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩 寵 與 教 會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
 今 此 教 會 爲 祈  
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 あ え 蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。  
 今 何 時 世 世  
 ぜんのおのきゆうせいしゅよ、なんぢはかよりふ復  
 全 能 救 世 主 爾 墓  
 くかつせしに、ぢごくはきせきをみて  
 活 地 獄 奇 蹟 見  
 おののき、ししやおき、ぞうぶ  
 慄 死 者 起 造 物  
 つはみてなんぢとともによろこび、アダムは  
 見 爾 偕 喜

ともにたのしいみ、わがきゆうせいしゅ  
 共 樂 我 救 世 主  
 よ、せかいはつねになんぢをほめうとお  
 世 界 常 爾 讚 歌  
 お う。

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め  
 常 生 の 者 我 等 を 憐

よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、 せい  
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅 聖

なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ  
 常 生 の 者 我 等 を 憐

め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、  
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せい しん  
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う  
 聖 なる 神 聖 なる 勇

き、 せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 の 者 我 等

あ わ れ め よ 。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ  
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 プロキメン 提綱 主日第2調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ  
主 我 力 我 歌 彼 我  
が す く い と な れ り 。  
救

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ  
主 我 力 我 歌 彼 我  
が す く い と な れ り 。  
救

誦經) 主は、我が力、我が歌なり、

か れ は わ が す く い と な れ り 。  
彼 我 救

【 アポストロス 使徒經 194端 コリント後書 11章31節~12章9節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、神、我等の主イイススハリストスの父、世世に祝讃せらるる者は、我が謊

らざるを知る。ダマスクに於て、アレタ王の邑宰我を執えんと欲して、ダマスクの邑を守  
 れり、我筐を以て牖より牆に循い、縋り下されて、彼の手を脱れたり。誇ることは我が  
 爲に益する所なし、蓋我主の顯現と默示とに及ばん。我ハリストスに在る一人を知  
 る、此の人は十四年前に、(肉體に在りてか、知らず、肉體の外に在りてか、知らず、神  
 之を知る、)第三重の天に擧げられたり。我此の人に於て、其(肉體に在りてか、肉體  
 の外に在りてか、知らず、神之を知る、)樂園に上げられて、道い難き言、人の語る能わ  
 ざる者を聞きしを知る。我此くの若き人を以て誇らん、己を以て誇らず、或は私の弱  
 きを誇らんのみ。我若し誇らんと欲せば、無智なる者と爲らず、蓋眞を言わん、然れど  
 も我自ら戒む、恐らくは人、我に見る所、或は我に聞く所に過ぎて、我を擬ら  
 ん。默示の至大なるに因りて我が高ぶらざらん爲に、一の棘は我が肉體に與えられたり、  
 即サタナの使なり、我を撃たん爲、我が高ぶらざらん爲なり。我三次主に之を我よ  
 り離さんことを求めたり。然れども主は我に謂えり、私の恩寵は爾に足れり、蓋我  
 の能は弱き中に行わる。故に我寧甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの能の  
 内の内に寓らん爲なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わたしが偽りを言っていない  
 ことを、ご存じである。ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマスコ人の町を監視し  
 たことがあったが、その時わたしは窓から町の城壁づたいに、かごでつり降ろされて、彼の手からのが  
 れた。わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主のまぼろしと啓示とについて語ろう。わ  
 たしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた  
 —それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らな  
 い。神がご存じである。この人が—それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、  
 わたしは知らない。神がご存じである—パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人  
 間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。わたしはこういう人について誇ろう。  
 しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。もつとも、わたしが誇ろうと  
 すれば、ほんとうの事を言うのだから、愚か者にはならないだろう。しかし、それはさし控えよう。わ  
 たしがすぐれた啓示を受けているので、わたしについて見たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶ  
 られるかも知れないから。そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。  
 それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。このことについて、わたしは彼  
 を離れ去らせて下さるようと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあな

たに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

\*\*\*\*\*

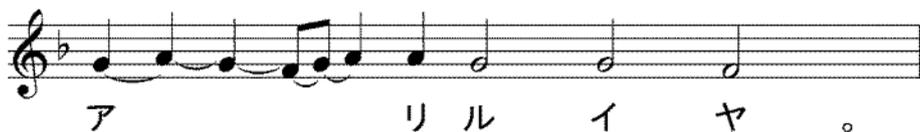
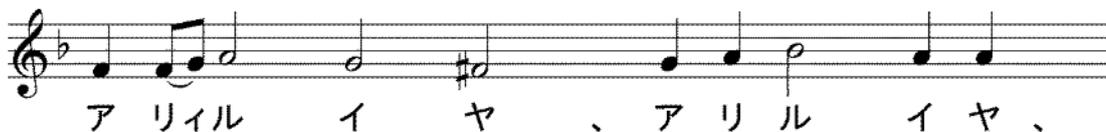
【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

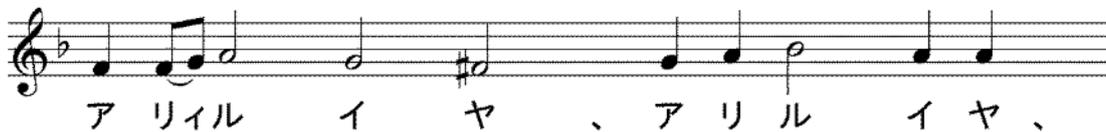
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

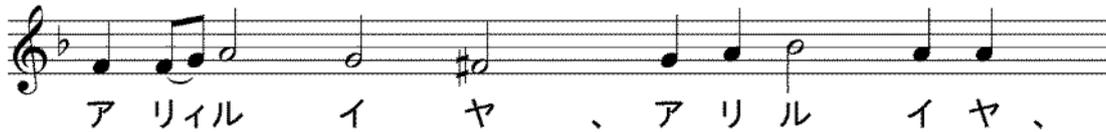
誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>ねが しゅ うれい ひ おい なんぢ き</sup> 願わくは主は 憂の日に於て 爾に聴き、<sup>かみ な なんぢ ふせ まも</sup> イアコフの神の名は 爾を扨ぎ衛らん、



誦經) <sup>しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき われら き たま</sup> 主よ、王を救え、又我等が 爾に呼ばん時、我等に聴き給え、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ  
畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

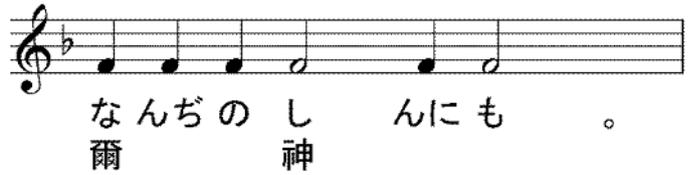
おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ  
を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ わげん ちち しせいしぜん  
爾は我が 靈 と體 との光 照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

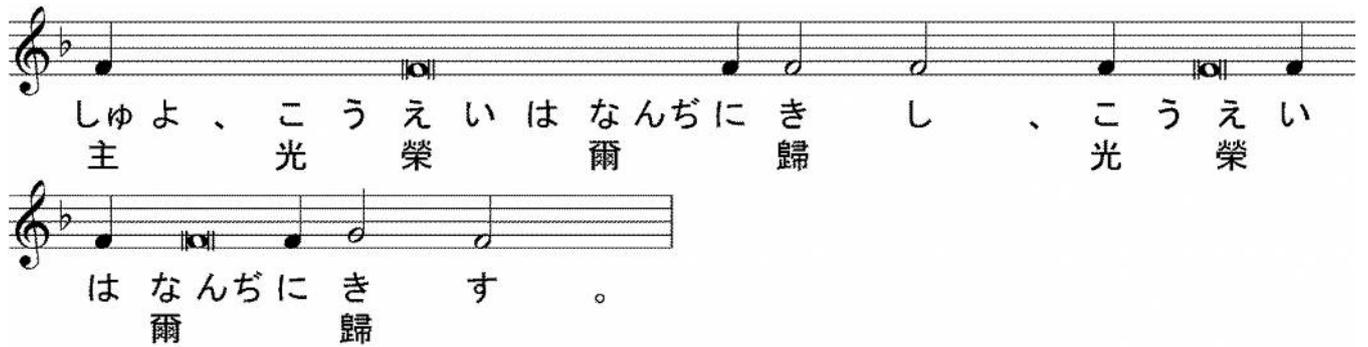
いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書26 端 6章31~36 節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん  
睿智、 肅みて立て 聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) でん せいふくいんけい よみ  
ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) つつし き しゅい ひと なんぢら おこな ほつ こと なんぢら か ごと  
謹みて聴くべし、 主曰えり、 人の 爾等に行わんを欲する事は、 爾等も是くの如く

これ ひと おこな なんぢらも なんぢら あい もの あい なんぢら なん かんしゃ  
之を人に行え。 爾等若し 爾等を愛する者を愛せば、 爾等に何の感謝かあらん、

けだしぎいにんら かれら あい もの あい も なんぢら ぜん おこな もの ぜん おこな なんぢ  
蓋 罪人等も彼等を愛する者を愛す。 若し 爾等に善を行う者に善を行わば、 爾

ら なん かんしゃ けだしぎいにんら か ごと こと おこな も かせ のぞみ もの  
等に何の感謝かあらん、 蓋 罪人等も是くの如き事を行う。 若し返さる望ある者に

か なんぢら なん かんしゃ けだしぎいにんら すう ごと かせ ため ぎいにんら か  
借さば、 爾等に何の感謝かあらん、 蓋 罪人等も數の如く返されん爲に 罪人等に借す

しか なんぢらてき あい なに のぞ ぜん おこな またか あた すなわちなんぢ  
なり。 然れども 爾等敵を愛し、 何を望まずして善を行い、 又借し與えよ、 則 爾

ら むくい おお なんぢらしじょうしゃ こ な けだしかれ おん そむ ものおよ あ もの  
等の賞は多からん、 爾等至上者の子と爲らん、 蓋 彼は恩に負く者及び悪しき者に

じあい ほどこ ゆえ なんぢらじれん なんぢら ちち じれん ごと  
慈愛を施す。 故に 爾等慈憐なること、 爾等の父の慈憐なるが如くなれ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ。自分を愛してくれる者を愛したからとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、自分を愛してくれる者を愛している。自分によくしてくれる者によくしたとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、そ

れくらいの事はしている。また返してもらおうつもりで貸したとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でも、同じだけのものを返してもらおうとして、仲間に貸すのである。しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがたはいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんちにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんちにきす。  
 爾 歸